

世の中が新型コロナで自粛ムードの3月、縮小した内容でしたが、子供の学校の卒業式に参加しました。

校長先生からは「LINK」という、盛岡と世界はいろいろなところで繋がっている、繋がっていく、と話がありました。それをうかがい、私たち土木技術者は、地球の未来を支える子供たちのためにも、土木インフラを守り、また土木の大切さを、子や孫、それ以降にも伝えていくことが使命だと、痛感しました。

盛岡で代表される身近な土木インフラといえば、ご存じ「開運橋」が真っ先にあげられます。氷川きよしさんの歌にもある別名「二度泣き橋」と呼ばれる橋長82.5mのランガートラス橋。駅を降り県庁方面に向かうと、北上川を跨いでいます。春、橋の上から北にそびえ立つ残雪の岩手山は絶景、まさに岩手の玄関口の象徴です。

ちょうど4年前に開催された岩手国体に合わせ、塗装の塗替え工事が2016年2月に完成しました。

アーチ部分が完全に防護パネルで覆われた現場を見学した際、建設当時にタイムスリップし、建設に携わった人々の思いが伝わる様な不思議な感覚に陥りました。

特殊なブラスト工法のため、防護服、ゴーグル、防護マスク、長靴の完全防備の装いでの見学でした。

建設当時昭和28（1953）年は、鋼材の酸化皮膜である黒皮の上に塗装が施されていました。ブラストにより、黒皮が除去されると、そこには美しい銀色のメタリックな素地が。なんともレトロな情景でした。

塗替え塗装はその素地の上に重防食塗装を施すもので、建設当時以上の塗装性能が期待できます。現在は、塗装工事完了後4年が経過しました。歩道から路上の鋼桁を眺めると、サビは発生しておらず、「ムーンホワイト」の塗装色は、昼間も、夜のライトアップでも私たち市民や訪れる人々の目を楽しませてくれています。

身近な土木インフラには、計画や設計、工事に携わった人たちの様々な思いが込められています。いろいろなエピソードが隠されていて、知らず知らず

のうちに、私たちの生活にそれが浸透していると感じます。

現代の社会ではインターネットやスマートフォンの普及により、ネット通販、ゲーム等、新たな5Gと便利で華やかな生活、仕事に目が行きがちです。電子端末とクレジットカードさえあれば日本のどこからでも買い物ができ、まさに世界と「LINK」しています。

では、ネットで購入した品物は、どのようにして届くのでしょうか。インターネットでの買い物の多くは、航空・航路・鉄道、最後は道路という流通を経て、私たちの手元に届くのです。仮想空間を実現するための社会インフラの必要性は、言わずと知れたことで、土木インフラはなくてはならない重要な役割を果たしています。

しかし、積載量、交通量増加により、物流を支える特に道路、橋、トンネルは、過酷な環境となっています。中でも私たちが生活する岩手は、冬期の厳しい環境に加え、大雨や台風の襲来などの異常気象の影響で、置かれる環境はさらに厳しいものとなっています。

東日本大震災大津波から10年目、土木インフラが数多く建設され、復興事業も大詰めを迎えました。岩手の玄関口と沿岸部の復興インフラを結んでいるのは、道路や橋、トンネルなどのごく当たり前にある土木インフラであり、それは世界中と「LINK」しています。

新型コロナで、ごく当たり前で平和な生活が、そうではなくなっている現状の中、「ごく当たり前の生活」がいかに尊く幸せなことかを思い知らされました。

土木は今日まで脈々と人々の手で守り伝えられてきました。現代の便利な生活を支えるのも、やはり土木であるといえます。

土木インフラは世界中と「LINK」し、子供たちの未来や夢とも「LINK」しています。そのことを常に念頭におき、「ごく当たり前」の土木インフラを守り未来につなげる技術者のひとりとして、土木に携わっていきます。